

大阪町民常食が低蛋白、低脂肪の明治六年に、エルメレンス指導による日本最初の栄養豊かな病院給食が直営で始められ、この調理配膳は栄養的衛生的に管理指導され、毎回医師によって検査するという、完全に近代的な日本最初の病院給食が直営で明治六年府立大阪病院（後の阪大病院）において始まった。

（奈良佐保女学院短期大学）

梅園医学論の立場

丸山敏秋

「君、医を業とすると雖も、素顔にあらず。その祖業に背かざるのみ」——三浦黄鶴は、父・梅園の医業に対する真情をこう伝えている（『先府君攀山先生行状』）。豊後国東の僻村に生まれ、生涯のほとんどをこの地で送った梅園にとつて、祖父以来の医業を継承してはいたものの、自ら本業と任じていたのは「条理学」を完成して旧学の弊を革新することにあった。

医師として、梅園の医術が名声を博したという記録はない。だがたとえ医術は凡庸であったにしても、彼が形成したところの斬新な医学論は、江戸時代医学史において特筆すべき業績であった。主著『玄語』に展開された彼の条理学が、ほとんど孤高というべき独創性をもつがゆえに、それに裏付けられた医学論を日本医学史上に位置づけることは難しい。ここではその試みを果たすために必要なくつ

かの視点を指摘してみる。

梅園の医学論は『贅語』身生帙をはじめ『造物余譚』『身生余譚』『養生訓』、あるいは残された書簡のうちに見ることがができる。彼は享保八（一七二三）年に生まれ、寛政元（一七七三）年に卒したが、この時期ほど江戸時代の文化史を論ずる上で重要かつ興味深い時はない。同時代人の医家

には、漢方に山脇東洋、永富独嘯庵、吉益東洞、望月三英、内藤希哲、香月牛山などの英邁が存し、蘭方では前野良沢、杉田玄白らがいる。また自然科学に新生面を拓いた平賀源内、麻田剛立、伊能忠敬が、さらに富永仲基、本居宣長、山片蟠桃ら特異な思想家が活躍したのも、ほぼ同時代である。蘭学が勃興して西洋近代科学が浸透しはじめ、「復古」思潮と経験主義の波が押しよせるこの時代に、梅園は生きた。それはまた「独創」の時代でもあった。この歴史的背景を見透すことが、第一の視点である。

次なる視点は、条理学と医学論との関わりにある。「天地は一気物なり。気外に物なく、物外に気なし。一条の妙理、宇宙を貫徹す」と言い、「天地の道は陰陽にして、陰陽の体は対して相反す。反するに因りて一に合す」と梅園

は説く。中国古来の気の哲学と陰陽論をベースに、「反観合一」と呼ばれる徹底した二分法的思惟に基づいて、その条理学は形成された。相対し相待する二元によって剖析される事象のうちには、もちろん生命現象や人体の構造・機能も含まれている。

『玄語』の執筆が一段落して『贅語』にむかった頃、梅園は集中的に医書を読破している。発見した「条理」で『内経』以下歴代の医書を照らしてみたとき、採るべきものと棄て去るべきもの、新たに補う必要のあるものが明白となった。詳細は略すが、 \wedge 本気 \rightarrow 神気 \vee \wedge 資始 \rightarrow 資継 \vee なる独特な概念を用いて生理・病理を論じ、人体解剖の成果に基づいて独自の臟腑観を唱えるなど、梅園流の医学論が構築されていたのである。

梅園の立場を闡明しようとするとき、蘭学（特に解剖学）および古方派との関係も主要な視点となる。青年期に長崎へ遊学して蘭学に目を開いた彼は、和洋の解剖書に親しみ、その重要性を認識した。とりわけ麻田剛立を友として深く交わり、広汎な知識を身につけている。自ら魚鳥獸を解剖したことも幾度となくあったらしい。この点から見

て、梅園は確かに当時としては卓越した経験主義の精神を備えていたのであるが、それを徹底することはできなかった。解剖書の正確な記載でも「条理」にそぐわぬものは誤りと決めつけた事実がそれを証する。彼が自然科学者ではなく、自然哲学者と呼ばれるゆえんである。

梅園医学論の足場はあくまで漢方にあつたが、この伝統医学が尚ぶ古典医書に対しても、彼は容赦なき批判的吟味を加えている。特に五行論を妄誕と退ける彼にとって、
△内経系医学√は信頼するに足りなかつた。「五行生剋」と「神仙服食」を医の二惑と見て排し、医学は「条理」に求め「感応(効能)」に験することだと説く梅園の立場は、古方派のそれに近い。事実、香川修庵に親しんだことは著書のうちに見えるし、吉益東洞の名も好意的に現れている。臨床では腹診を重視したらしい。また医道においては永田徳本を「本邦医流の第一品」と讃え、後藤良山・永富独嘯庵を評価している。

しかしながら、梅園は古方派の尊ぶ張仲景を必ずしも推賞しない。その処方は見事だが理論は誤りと言ひ、「医家に正経なし」と断じた。『傷寒論』中の五行六経を排し、

「医薬の方は他なし、感応を病情薬性に審かにするにあり」と説く彼の立場は、古方派の中でも東洞に通ずる。しかし東洞が臨床家として『傷寒論』をベースに「方証相對」の実証を体系づけようとしたのに対し、梅園は自然哲学者として求心的に「条理」を探究し、それより敷衍して医学論の体系化を企つた。梅園は古方派と親近しながらも、決定的な一線を画したのである。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室)